

1250年にわたる危機管理

正倉院宝物と正倉院

松田ばこむ

秋の奈良を訪れたことはあるだろうか。

興福寺・東大寺、春日大社・若草山と、観光スポットが集中する奈良公園がいよいよ、日ごろから観光客でにぎわっているが、公園の木々が色づきはじめるところに訪れると、尋常とは思えない人出に驚かされることがある。奈良国立博物館で毎秋開催される「正倉院展」に向かう人々だ。

正倉院宝物が一般の人々に初公開されたのは、明治8(1875)年の「第1次奈良博覧会」にまでさかのぼる。奈良の諸大寺などが所蔵する宝物をはじめ、商工業製品・名産品などが多数出品されたが、中でも話題を呼んだのが正倉院宝物であった。宝物の素晴らしさに人々は声を失ったという。

明治23(1891)年まで、博覧会は毎年のように開催されたが、正倉院宝物が展示されたのは明治13(1881)年までの4回のみ。半ば戸外ともいえる大仏殿回廊が展示会場に充てられたため、湿気などによる宝物の劣化・損傷を危惧したからである。

以後、正倉院宝物は人々の目から閉ざされ、拝観はごく限られた政府高官・学者・工芸家などに、それも曝涼ばくりょうの時期に限って許されたにすぎない。しかし、博覧会を契機に正倉院宝

物への関心は高まっていった。

世界的にもその存在が知られるようになり、来日した多くの外国貴紳が拝観を求めようになった。やや後のことになるが、名探偵シャーロック・ホームズの短編にも正倉院についての記述がある。欧米の大衆向け推理小説にも登場したほどだから、そのころには世界でも有数の宝物コレクションとして認められていたということであろう。

正倉院の歴史は、奈良時代の天平勝宝8(756)年に、光明皇后が聖武天皇ゆかりの品々を献納したことに始まる。その後の長い歴史の中で、仏具・楽器・武器・文書・薬物などが随時納められ、今日に至っている。

螺鈿紫檀五絃琵琶らでんしたんのごげんのびわと鳥毛立女屏風とりげりつじよのびょうぶ、瑠璃坏るりのつきなどは、たとえ「正倉院展」に行ったことのない人でも、その写真を美術や歴史の教科書で目にしているはずだ。

正倉院コレクションの評価が高いのは、宝物の数や種類が豊富なだけではない。

まず、出土品として近年になって掘り出されたものではなく、長年受け継がれてきた伝世品であることだ。製作年代や使用年代があいまいな出土

品とは異なり、由緒や伝来がはっきりしていることもあって、歴史的価値は高い。

もう一つ。宝物は中国の盛唐時代に舶来した品々が多く、さらに遠く中近東・ギリシア・ローマにつながることも注目される。正倉院は「シルクロードの終着駅」とも呼ばれるように、7～8世紀の世界文化が凝縮されているのである。

正倉院宝物は、長い年月を経て古色を帯びているものも多いが、中には、鮮やかな色彩が残っていて、今作ったばかりという印象を与えるものさえある。

極めて良好な状態を保っている理由は、幾つか考えられる。

風通しのいい丘陵の中程に位置するという立地条件。高床式という建築構造。辛櫃からびつに入れて湿気を防ぐという保存形式(伝説にさえなっている校倉作りによる庫内の湿度調整は、さほど効果がなかったようだが...)。「勅封」「網封」という倉を容易に開けられない厳重な管理制度。

こうした諸条件が、宝物に僥倖ぜうじやうをもたらしたといえるだろう。

正倉院そのものが現存していることも奇跡に近い。なにしろ東大寺以

外の正倉はすべて失われているのだから。実はその長い歴史の中で、正倉院は何回も焼失の危機に直面している。300メートルほど隔てて南側に建っている大仏殿は兵火により何回も炎上しているし、正倉院そのものも落雷による出火を経験している。

今日まで正倉院が残り、しかも宝物が極めて良い状態で伝えられているのは、たぐいまれな天佑に恵まれたと思わざるを得ない。

ただ、それだけではないはずだ。

何よりも、宝物を守ろうという意思の持続があり、宝物の保存管理への努力が、次の世代に確実に受け継がれていったからだろう。

明治の初年に、正倉院宝物は未曾^{みそ}有^うの危機に襲われている。いわゆる^{はいぶつ きしゃく}廃仏毀釈だ。この運動により、全国の寺院が荒廃した。各地で寺地の没収や、寺の破壊や解体、寺宝の略奪が

行われた。信じがたい話だが、興福寺の五重塔が売りに出され、塔に火を付けて相輪(塔先端の金属部)を回収しようとしたという話さえ残っている。この時期に、多くの仏教美術品が海外に流出していったのである。

勅封や網封といった制度で厳重に守られていた正倉院とはいえ、古美術は一顧だにされない風潮の中で、宝物が散逸する可能性も小さくはなかったはずだ。宝物を守った人たちの努力・苦心はいかばかりであったろう。

やがて^{はいぶつ きしゃく}廃仏毀釈の嵐が過ぎると、あまりにも過激な欧化思想への反省から、わが国の文化が見直され、文化財保護への関心も高まっていった。明治8(1875)年には前述の奈良博覧会が開催され、明治20年代に入ると

全国で文化財調査が行われ、東京の帝国博物館に続き、帝国京都博物館や帝国奈良博物館も開館した。さらに明治25(1892)年からは、正倉院宝物の本格的な調査・修理・復元も始まっている。

危機は去ったのである。

長年にわたって守り続けられてきた正倉院宝物だからこそ、次代に伝えていかねばならないという強い意志が、これからも宝物を守り続けていくのであろう。

【参考文献】

- 和田 軍一『正倉院案内』吉川弘文館
- 米田 雄介『正倉院宝物の歴史と保存』吉川弘文館



昭和15(1940)年には東京国立博物館においても正倉院宝物が展示されたことがある。